

紋附

(地賞)

備後國上下町 岡田美知代

「紋附々々つて、お母さんのやうに仰しやつたつて、實際縞物の方が餘計いりますよ、私なんか別して、東京に居て、一寸々々出かけなきやならないし、いつもいつも同じものも着て行かれないわ、ですからねお母

が揃った後のことですよ。」

「イヘイ、それは左様で御座います、けども種々お流儀が御座りまして、お嬢ちやまの仰しやる通り、アノ紋附は程々にして、綿入を袴の代用にして置けばえ、と仰しやる向も御座います。ですけどもそれでは何うもお裾の具合が折合ひませんで、イヘイ。」
「さうですとも、男子なら裾はお袴でかくれるし、袖口はお羽織でごまかすし、當人さへ少し辛抱すれば如何にかならうけれど、女のものほまさかねえ。」

「併し何ぼ男や云ひましても、汗を出し、四月のなかばに綿入れ着て力んで御座るのは、随分つらう御座りますやろ。」

「ホホ、。」

「へ、へ。」

「可いわ、皆で私をいぢめるんだから……でもね實際紋附もいるのね、華族女學校あたりでは、運動會の見物だつて皆な白袴紋附よ、だつて陛下が御行啓になるんですもの、中にはね散々手を廻して、やつと招待券を貰つたのは好いが、紋附の用意が一枚もないもんだから行けない人もあつたわ。」

「イヘイ、先度私が廣島に参りました時、丁度閑院宮妃

さん、私あのお召にしてよ。」

「だつてお前、幾ら上等でも縞物は縞物、紋附の代用にはなりませんからね。ねえ升屋さん。」

「イヘイ、左様で御座います、併しソノお單衣はお單衣でお染めになつて、これはこれで又、へ、へ。」

「ホホホ、それならね、これの御機嫌も至極好いんだけど。實際昔から縞は五月からは自由だとしてはあるが、何だか斯う、餘り涼しさうで、是非袴の直ぐ次ぎに着るものを用意して置かないではと思つてね。」

「イヘイ、それはもう、御充分で御座いますとも、へい。」

「だつてお母さん、滅多に着ることないぢやありませんか、不經濟だわ、あんなもの私……」

「いらないの？ ではね升屋さん、いらないさうだから。」

「アラ、お母さんてば、うそですよ、私些ともいらないなんて云やしないわ。」

「へ、へ、大丈夫で御座いますよ、お嬢ちやま、是非私が染めてあげますから。」

「ホ、矢張り欲しい癖にして、何だ彼だと云つては兩方買はうと思ひなのだけど、縞物は先づ一通り禮服

殿下が愛國婦人會の方へおこしになりました、會員の方々が段々お出迎へで、何れ近在から出て来た人達で御座いませう、黒の紋附はよう御座りますけど、石餅をあなた、都合五人まで見かけまして御座います。」

「マア、随分だわね、それで女子の？」

「え、え、御婦人なので、尤もその連中はいきなり仕賣屋へ出かけて、自分の體を着物に合して買はうと云ふので御座いますから、お話にはなりません、随分呑氣なものやと存じまして。」

「ホホ、面白い事ばかり！」

評 女らしい會話で、鳥渡面白い。殊に嬢さんが一番よく出て居る。